

『四海茫茫』

◎若きサムライ

アメリカで発行される週刊ニュース情報誌『TIME』(1923年創刊)の表紙を飾ったわが国海運人が1人存在する。日本郵船の社長に就いていた各務鎌吉(かがみ・けんきち)氏がその人。

氏は1868年(明治元年)岐阜県安食村(あじきむら、現在の岐阜市)生まれ。東京高等商業学校(一橋大学の前身)を首席で卒業し、東京海上保険に入社、物事の本質をつかみ取る洞察力と圧倒的な行動力で危機に瀕していた自社の損保経営を立て直し、次代に引き継ぐことに成功した。このため「わが国損保業の父」と称された。1939年、東京海上、明治火災、三菱海上、東明火災の会長に在職したまま逝去した。この間、1929年(昭和4年)から日本郵船社長、1935年(昭和10年)から同会長のポストにも就いていた。氏の顔がタイム誌の表紙に載ったのは31年5月18日号。郵船社長を兼務していた時代だ。その事実にすぎ「海運人」と紹介したが、氏の本分はあくまで損保業にあった。その業績は海外でも高く評価され、死去の折はロンドン・タイムズをはじめ欧米有力紙がこぞって哀悼の意を表した。なお、タイム誌が創刊以来カバーパーソンに選んだ日本人は38回31人(米国版のみの累計)と極めて少ない。各務氏は東郷平八郎(元帥海軍大将)、昭和天皇に続いて日本人では3人目、日本人実業家としては初めてだった。

その各務氏を「心の師」と仰いだ人物がいる。山縣勝見氏だ。

田村茂さん(本欄97回参照)によると、『白鹿』の醸造により酒造石高日本1位になった辰馬本家酒造は

日本郵船、大阪商船に対抗する社外船の一番手として海運経営にも本格的に乗り出していた。1885年(明治18年)の『辰馬回漕店』創設や1901年(明治34年)の『合資会社辰馬本家酒造汽船部』設立、1909年(明治42年)の『辰馬汽船合資会社』設立、1916年(大正5年)の『辰馬汽船株式会社』発足などがそれを物語る。

一方で辰馬本家酒造は損保業も興し、1919年(大正8年)、『辰馬海上火災保険株式会社』を設立した。山縣勝見(旧姓辰馬、本欄97回参照)氏は1925年(大正14年)、東京帝大を卒業して、この辰馬海上(興亜火災の前身)に入社した。

昭和の時代に入ると、損保業は厳しい試練にさらされた。1929年(昭和4年)10月に始まった世界金融恐慌が経済界を広く覆い、辰馬海上は船舶保険の再買取引失敗で極度の業績悪化に陥っていた。こうした中で辰馬海上は外国課を新設し、山縣氏を課長に任命した。

これはロンドン取引を改善するための人事だったが、事態の悪化に歯止めがかからず会社経営陣の総意は会社解散に大きく傾いた。こうした成り行きに真っ向から異を唱えたのが弱冠28歳の山縣外国課長であった。同課長は損保業の使命、社員の生活、家門の名誉などを理由に挙げ、会社再建を強く訴えたという。

会社上層部は山縣課長の意見を容れ、会社再建策の作成を指示した。

山縣課長は各務鎌吉東京海上会長の指導、支援を仰ごうと考えた。各務氏は損保業界の重鎮、指導的立場にあり、山縣氏は前々から各務氏を尊敬していた。また、各務氏が率いる東京海上は辰馬海上の大株主でもあった。山縣氏は自著『炉辺夜話』の中で各務氏に



助力を乞う場面を次のように書き残している。

「随分無鉄砲なことをしたものです。当時、各務鎌吉といえば、東京海上の会長として保険界に君臨していただけでなく、三菱の総帥として、三井の池田成彬とともに、自他共に許した財界の大立者でした。それに一面識もない白面の若造が、突然刺を通じて面会を求め、勝手な助力を乞うたのですから、(中略)無謀といえばこれほどの無謀はないし、無謀といえばこれほど無謀なことはありません」

しかし、各務氏は黙って話を聞き終え「よし分かった。考えてみよう」と協力を約束した。各務氏は山縣氏が常務取締役として辰馬海上の再建に当たることを条件に、自らも辰馬海上の取締役就任を引き受けた。ここに突破口が用意され、その後、辰馬海上は会社再建を果たした。山縣氏は「最初に私を見出し、私に働く場を与えてくれたのは、身内ではなく、第三者の各務さんだった」としている。実は各務氏も東京海上に入社して3年足らずという若い時代にロンドンで非常な苦労を経験していた。山縣氏の孤軍奮闘ぶりが昔日の自身の姿と重なり、「その志やよし」として若きサムライへの応援を決めたのであろう。

(瓜生隆幸)